

## プレ実習と評価実習の意識調査に関する比較検討

新潟リハビリテーション病院言語聴覚科・渡邊知佳子,  
内山晃子, 佐藤卓也, 佐藤厚  
新潟医療福祉大学言語聴覚学科・吉岡豊, 志村栄二

### 【背景】

評価実習は言語聴覚士養成教育において非常に重要であるが、その実習で掲げている様々な目標を達成するには十分な時間を確保できていない。そのため実習生はごく限られた時間の中で情報収集－評価検査の選定－検査施行－検査のまとめ・分析－レポート作成という一連のプロセスを学ばなければならない。しかし現状はその過程の中で問題を抱える実習生が多くいる。

今回、我々は新潟医療福祉大学言語聴覚学科と協力し、評価実習の前段階にプレ実習を設けた。これは患者1名に対して学生6～7名の1グループで2日間実施した。1日目は情報収集と評価検査の選定を行う。2日目はグループ代表1名が検者、1名が記録を担当し検査施行する。その後グループ内で検査のまとめ・分析、ディスカッション、レポート作成を行う。この一連のプロセスを体験し、評価実習をより有意義にすることを目的に実施した。

そこで、我々はこのプレ実習と評価実習後の学生の臨床に対する意識を比較することで、プレ実習の意義と課題について考察したので報告する。

### 【方法】

対象:新潟医療福祉大学言語聴覚学科3年生49名(7期生)  
方法:プレ実習後と評価実習後に同一アンケートを2回実施  
内容:各実習における情報収集、検査目的・施行方法・分析、患者への配慮等についての回答を集計し、検討を加えた。

### 【結果】

	プレ実習後	評価実習後
質問紙の回収率	78%	92%
検査の目的・施行方法を十分に理解した上で実施できた	37%	53%
患者さんの症候について事前に知識が十分であった	31%	17%
患者さんの体調や心理面に十分に配慮できた	65%	60%
適切な用語を用いてレポートをまとめることができた	44%	15%

プレ実習で学生が担当した役割の内訳は検査者16%、同室記録者16%、見学者68%であった。

プレ実習後の回答において評価実習に向けての自分の課題として「知識不足」に次いで「コミュニケーション能力を高めること」を、プレ実習が評価実習の何に役立つかについて「検査から評価までの流れ・手順」を挙げる学生が多かった。評価実習後の回答において次回の臨床実習に向けての自分の課題を「知識を増やす」に次いで「コミュニケーション能力の向上」と挙げる学生が多かった。

### 【考察】

プレ実習ではグループディスカッションにより互いの知識を高め合うことができた。また検査の目的・施行方法を事前に再学習して臨んでいるため、その実施は比較的スムーズであった。これは自由回答のコメントでも得ることができたことから意義があったと言える。

その反面、グループディスカッションのために、個々で考察する機会が少なかったり、指導もグループ単位であったこと、さらにレポートのフィードバックが大学・病院側から全くないために、学生はプレ実習終了時の自己評価を過信する傾向にあった。それに対して評価実習はマンツーマンの指導が可能のため、十分な指導がなされる。その結果、評価実習後のアンケートでは学生の自己評価は厳しくなる傾向にあったと考える。

今回のプレ実習は評価実習とは大きく異なった条件であり、一連のプロセスをわずかな時間で、且つグループで協力して行ったために個人でその全てを網羅することは難しかった。

さらに、どちらのアンケートでも患者との「コミュニケーション」を課題としている学生が多かったが、プレ実習では実際に患者と関わるができる学生が限られていた。その限られた学生もまた、十分なレポートを形成することができずに、検査を施行しなければならなかった。検査の目的・施行方法などは事前の再学習で補えるが、直接患者と触れる機会は個人での臨床実習でなければ困難であり、「コミュニケーション能力」を向上することは難しい。実際に当科で引き受ける実習生の多くは、コミュニケーション能力が低く、患者の心理面への配慮、レポート形成についての指導を十分に行う必要がある。

### 【結論】

以上より、学生自身、そして指導者側も「コミュニケーション」が第一の課題であると言える。

そこで、本年度のプレ実習は「コミュニケーション」により焦点を当て、当院で行っている病棟のグループ訓練に数回参加し、個々に患者と接する機会を設けることとした。レクリエーションや自由会話の中で、患者への気配りや会話を学べる他、患者とセラピストのやりとりを観察することで、「コミュニケーション能力」の向上が期待できると考える。本年度はこの仮説のもと、大学と協力し合い、プレ実習や評価実習をより有意義にするよう努めていきたい。